様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　３０　年　　６　月　　１　日現在

機関番号：　３３９１０
研究種目：　基盤研究(C)（一般）
研究期間：　2015～2017
課題番号：　１５Ｋ０２８７７

研究課題名（和文）近世日本海沿岸の鯨組と漁場と捕獲鯨の関係性に関する研究

研究課題名（英文）Study on the relationship of early modern Japan Sea coast of whale set and the fishing grounds and the capture whales

研究代表者

末田　智樹（SUETA, Tomoki）

中部大学・人文学部・准教授

研究者番号：８０３８７６３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代の日本海沿岸には、肥前国（長崎県）を中心とした西海地域と長門国（山口県）の北浦地域に好適な捕鯨漁場（以下、漁場＝漁村）が存在した。そこで捕鯨業を成立・展開した専門集団を「鯨組」と呼称した。西海地域の九州鯨組が北浦地域の漁村へ出漁した背景や条件、雇用・漁場利用問題、さらに捕獲鯨の種類について考察を深めた。
　その結果、九州鯨組は享保～天保期にて北浦地域の漁村へ出漁し、漁場の範囲を拡大させた。しかも安政期の萩藩直営の鯨組では、西海地域の巨大鯨組から数百人規模を個別に雇用したことが判明した。西海地域では主にセミ鯨が捕獲されたのに対し、北浦地域では主にザトウ鯨が捕獲されたことが判明した。

研究成果の概要（英文）：On the Japan Sea coast of the Edo era, there were suitable whaling fishing grounds in the West Sea region centered on Hizen (Nagasaki prefecture) and Kitaura region of Nagato country (Yamaguchi prefecture). The special group which established and deployed the whaling industry in both regions was called "whale group". The background and conditions when the Kyushu Whale Group in the Saikai area advanced to the fishing village in the Kitaura district, the problems of employment and fishing ground use, and the types of captured whales were deepened.
　As a result, the Kyushu Whale Group fished to the fishing village of Kitaura area in the Kyoho - Tenpo period and expanded the range of fishing grounds. Moreover, it was discovered that hire group managed by Hagi clan individually hired hundreds of people from the giant whale group in the West Sea area. It was revealed that Semi - whales were mainly captured in the Saikai area and other whales were captured in Kitaura area.

研究分野：　日本史

キーワード：　近世日本捕鯨業　日本海沿岸捕鯨業　西海捕鯨業地域　北浦地域の捕鯨漁場　九州鯨組　巨大鯨組と中小鯨組　勢美鯨と座頭鯨　運上銀と御用油

１．研究開始当初の背景

⑴ 2002 年 4 月に第 54 回国際捕鯨委員会年次会議が山口県下関市で開催された。これを契機に日本の捕鯨産業の歴史と伝統を見直すために、2002 年 3 月に第 1 回日本伝統捕鯨地域サミットが山口県長門市で開催された。日本鯨類研究所･各担当市町主催のもと、長崎県生月町（第2回）、高知県室戸市（第3回）、山口県下関市（第 4 回）、2006 年 4 月に最終開催地として和歌山県太地町（第 5 回）で行われた。

縄文時代から鯨の利用がみられ、近世期には一大産業として発展し、近現代へと受け継がれてきた史実が初めて通史的に整理され、報告書としてまとめられた。しかし既述の会議では、日本捕鯨業の一大転換点であった近世期の紀州･土佐･北浦（長州）･西海の 4 つの捕鯨業地域の性格と相互の関係性を問うような内容はみられなく、地元の歴史家より各地域の重要性が主張されたに留まった。

⑵（⑴）に対して、新たな学術的研究として立教大学の荒野泰典が、捕鯨を手がかりとした近世日本における国際化の展開意義と方向性を見定める研究を積極的に進め、日本と世界の捕鯨史関係の研究者の交流が進んだ（荒野、2008）。西海地域の捕鯨業に関しては、末田（2004、2013、2015）のほか、九州大学の研究者を中心に研究が新たに進められた（岩﨑、2010、古賀、2010、森･宮崎、2012）。民俗学的視点からも優れた成果がみられた（小島編、2009、中園･安永、2010）。

以上の多くの成果が生まれながらも、鯨組の出漁･雇用といった諸活動から各地域の捕鯨漁場（以下、漁場）の地域性や互いの関係性について明らかにした研究は見られなかった。

⑶ 近世日本沿海の捕鯨業については、戦後以降、近世漁業史、地方産業史、商人史、捕鯨業史からの研究蓄積が多数ある。過去の研究は藩領内もしくは狭い地域に限定された分析であった。藩領を越えて広い沿岸地域において捕鯨業の技術が、どのように伝播して鯨組が成立･展開していた**のかについて深める課題は未だ多い**。

西海地域（長崎･佐賀県）の捕鯨業に対して、日本海沿岸の萩藩内の多くの漁場で広範囲に行われた北浦地域（山口県）の捕鯨業がある。西海･北浦両地域における捕鯨業の関係性については、北浦地域の捕鯨業史研究から触れられながらも、西海地域の鯨組が出漁した漁場での背景･条件･活動状況について、不明瞭な部分も多かったために深められてこなかった。

２．研究の目的

本研究では、西海・北浦両地域にてどのような鯨組が藩領内のみならず領外の漁場へ出漁したのか。目的地の漁場の如何なる背景と条件で入漁が許され、どのような鯨を捕獲し活動したのか。同時に、鯨販売の需要・取引面と雇用面について考察することを目的とする。これらの考察によって漁場利用を通した捕鯨業と周辺の漁村との関係について明らかにする。具体的には次の 2 つである。

⑴ 西海地域の諸藩である平戸･唐津･五島･大村の諸藩に出現した 1 組 500 人前後の組織規模を有する巨大鯨組が、萩藩の北浦地域の漁場と地元の鯨組にどのような影響を及ぼしたのか。これらの点に関して鯨組組織の違いや、漁村が入漁させた理由（＝背景）、藩への上納（＝条件）、漁場利用（の変化）などから明らかにする。

⑵ 西海地域と北浦地域を合わせた日本海沿岸のどこの漁場において、如何なる鯨が捕獲され、解体後の鯨商品がどのようなルートで、何れの商人･市場を通して流通していたのかについて明らかにする。

３．研究の方法

⑴ 日本海沿岸の捕鯨業については西海地域と北浦地域の 2 地域に分けられ、主に鯨塚（鯨墓）、捕鯨図説などを利用した民俗学の視点から両地域それぞれに研究が進められてきた。本研究では、両地域を日本海沿岸の捕鯨業地域として捉え直し、両地域における鯨組と漁場と捕獲鯨の関係性について、漁業史･経済史的に考察する方法をとった。

⑵ 両地域が広範囲に及ぶために、漁村･藩政の関係史料の解読からの分析のみならず、これらの史料から海上の漁場範囲や漁場利用の変化を復元する歴史地理学的観点を取り入れた。

⑶ 日本海沿岸の長崎･佐賀･福岡･山口県を中心とした史資料収集のみならず聞き取り調査を行った。とくに、現地の地域史に詳しい専門家と協力体制をとりながら、各県の鯨に関わる博物館、資料館にて調査を丹念に進め、捕鯨業史関連の文献･史資料を収集し分析する地域史的方法で考察を進めた。

４．研究成果

⑴ 2015 年度の研究成果

近世日本海沿岸地域の鯨組と漁場と捕獲鯨の関係性をテーマとする本研究では、西海地域と北浦地域における捕鯨業を事例とし、西海地域の巨大鯨組が北浦地域の漁場に、どのような影響を及ぼしたのかといった動向を中心に考察した。よって、両地域の鯨組組織の違いや、入漁を申請した鯨組と諸藩および漁村と藩政との諸関係について調査･史資料収集を行った。

①西海地域において近世初期から平戸町人を中核に最も多くの鯨組を輩出した平戸藩の漁場に着目した。とりわけ、近世中期以降に経営発展した生月島を本拠地とした益冨又左衛門組と平戸藩との諸関係（御用･運上銀と漁場）について、益冨家の分家として仕官した山縣家の鯨組関係史料を佐世保市立図書館から収集し分析を進めた。

②北浦地域の近世･近代捕鯨業に関する研究文献･自治体史を収集し、とくに西海地域の鯨組との関係に関する指摘について整理した。そのうえで従来の研究で使用がみられなかった『山口県史』(近年刊行) に含まれる捕鯨業関連史料と合わせて再考し、学会にて学会[学会発表の (10)]と論考[雑誌論文の (4)]で発表した。

また、所属する中部大学と日進市との市民向けの地域連携講座にて、上記の研究成果を講演[その他の (4)]した。すなわち、愛知県では非常に馴染のある伊勢湾･熊野灘など太平洋沿岸捕鯨業地域 (紀州･土佐･房州) ではなく、日本海沿岸捕鯨業地域における広範囲な展開について講演し、非常に興味を持った方々など多くの有意義な感想を得ることができた。

その後、山口県文書館において西海地域の巨大鯨組が北浦地域へ入漁した実態･事情を示す史料群を発見･収集し考察に入った。北浦地域の調査にあたっては山口大学経済学部木部和昭先生と山口県文書館研究員の先生方からご教示をいただき、研究の進展に繋がった。

これらの研究成果については、次年度の山口県地方史学会や地域漁業学会などで発表を行うことで、研究対象地域の専門研究者からコメントをいただき、それらを踏まえて論文を作成する予定で進めることができた (以下の 2016 年度参照)。

(2) 2016 年度の研究成果

2016 年度は、とくに北浦地域の捕鯨業に関する調査による史資料収集を進めた。

①まず、山口県文書館所蔵の藩政史料のなかの北浦地域全体の近世･近代捕鯨業に関する史料群を収集し分析を行った。次に、神奈川大学日本常民文化研究所に所蔵されている北浦地域の川尻浦の捕鯨業に関して、近世後期の帳簿の史料群を収集し分析を進めた。さらに、天保期の松江藩 (島根県) への九州鯨組の入漁に関する史料を収集し分析を行った。

②①の調査による研究成果としては、主に西海地域の九州鯨組が北浦地域の漁場に入漁した背景について、学会[学会発表の (7) 、(8) 、(9)]と研究会[その他の (2) (3)]で発表した。

以上、2 年間での学会と研究会の発表で多くの先生方にご教示をいただいた。なかでも繰り返すが、山口大学経済学部教授木部和昭先生および山口県文書館研究員の先生方に本研究を著しく進展させる貴重な発表機会やご教示をいただき、多くの課題解明に繋がった。

(3) 2017 年度の研究成果

最終年度は、西海･北浦両地域の鯨組の雇用問題と漁場と捕獲鯨の関わり合いについて調査研究を進めた。

①西海地域の九州鯨組 (中小･巨大鯨組) が北浦地域の漁場に出漁した動向を中心とした史料群 (山口県文書館所蔵) を収集し分析を行った。その結果、九州鯨組は享保～天保期にて北浦地域の漁場へ出漁し、さらに安政期の萩藩の御手組では巨大鯨組から数百人規模を個別に雇用したことが判明した。捕獲鯨については、西海地域では主に勢美鯨が捕獲されたのに対し、北浦地域では座頭鯨が多く捕獲された。

次に同文書館所蔵の瀬戸内海周防国佐郷島の庄屋史料に残されていた鯨組の網船である双海船の船頭･加子の雇用先についての史料群を収集し分析を行った。その結果、宝暦～文化期にて、西海地域の巨大鯨組である益冨･中尾･深澤･土肥組や平戸町人の中小鯨組に雇用されたことが判明した。

②①の研究成果としては、享保～文化期にて北浦地域の漁場へ出漁した九州鯨組の展開について、 学会[学会発表の (4) 、(5) 、(6)]と研究会[その他の (1)]で発表した。また、文化期の出漁に関する論考[雑誌論文の (3)]を発表した。

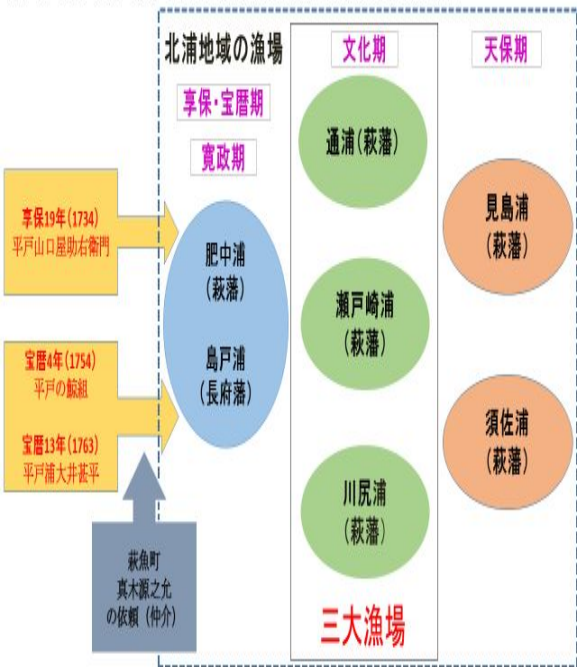
これらの過程で多くの先生方からご教示をいただき、西海地域の九州鯨組が北浦地域へ入漁した実態を明らかにすることができた。

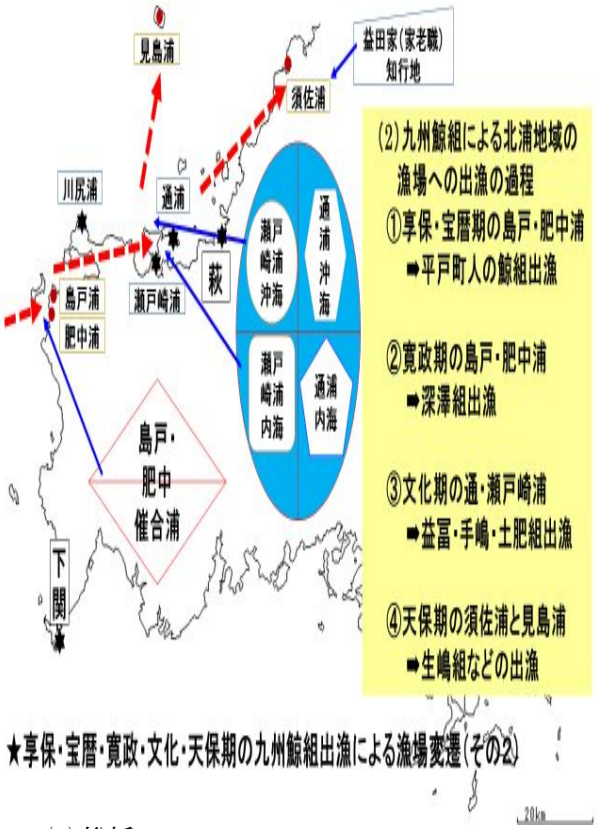
今後の展開としては天保期の北浦地域の捕鯨漁場と九州鯨組の関係について、論考[雑誌論文の (1) 、(2)]と学会[学会発表の (1) (2) (3)]で発表予定である。また、学会発表の (2) の内容を、学会雑誌『歴史地理学』(第 61 巻第 1 号、2019 年 1 月刊行予定) から発表するために作成していく予定である。加えて、益冨組の創業～幕末期の捕獲量と経営の盛衰についても 2 編の草稿をすでに作成しており、今後学会雑誌への投稿を試みていく。

なお、両地域を中心とする日本海沿岸の捕鯨業史に関する研究文献･史資料の整理については、当初目的の文献目録として発行までには至らなかったものの、学会発表の配布資料と論考の注記などの末尾で整理することができ、文献目録の下地は完成している。次の機会で刊行を進めていきたい。

以下に、学会や論考で発表し明らかにした西海地域の九州鯨組と北浦地域の漁場との関係図を 2 つ (漁場変遷その 1･2) ほど示しておく。

★享保･宝暦･寛政･文化･天保期の九州鯨組出漁による漁場変遷(その1)





★享保・宝暦・寛政・文化・天保期の九州鯨組出漁による漁場変遷(その2)

(4) 総括

17 世紀初頭から専門集団である鯨組が、紀州と土佐の両地域を中心に形成された。17 世紀中葉には、日本海沿岸の西海・北浦両地域へ鯨組が拡大し展開した。捕獲された鯨から生産された鯨油は、18 世紀以降において西日本の農村を中心に除蝗用の農薬として大いに使用された。それにより捕鯨業は 4 つの地域にて一大産業として発展し、近世後期には仙台藩や幕府による蝦夷地沿岸域における捕鯨業開発までの広がりをみせた。

以上の筆者が 2014 年までに進めた研究での指摘に対し、2015 年以降の本研究の考察結果として、さらに新たな見解を示しておきたい。

近世中後期に一大産業として発展するうえで重要な役割を果たした鯨組と漁場と捕獲鯨は、従来重要視されてきた紀州・土佐両地域の太平洋岸ではなく、西海・北浦両地域からなる日本海沿岸であったと考える。日本海沿岸において、とくに勢美鯨を集中的に捕獲することで、より多くの勢美鯨を捕獲できる漁場を専有する巨大鯨組が近世中期以降に西海地域に出現した。

日本海沿岸の捕鯨業では、広範囲な地域からの雇用と漁場利用の変化がみられた。

①西海地域の鯨組は、瀬戸内海の遠方から専門職である網船の船頭・加子を雇用した。これらを組み込んだ西海地域の巨大鯨組が北浦地域の漁村へ出漁した。そして、捕獲技術が伝播されたことで北浦地域における捕鯨に関わる漁村は窮乏から逃れることができ、一時的に潤うことができた。幕末期では萩藩産物会所の一環として大規模な御手組が出現し、薩長交易に貢献するために活動した。この直営の鯨組では、西海地域の巨大鯨組から羽指などの大量の専門職を雇用した。

②西海地域では浦請制による漁場利用がみられた。それが次第に拡大し、北浦地域でも地先権的な捕鯨業から浦請制へ変化する時期があった。

③太平洋沿岸の捕鯨業と比べてみると、西日本近海の捕鯨業は藩領域外への積極的な鯨組の出漁・移動と漁場利用がみられた。これらが近代以降の両地域における捕鯨業の広域的な雇用と漁場利用の拡大として表れ、近代日本捕鯨業の発展に繋がる契機となった。

しかし、日本海沿岸の鯨組が勢美鯨を大量に捕獲したことで、幕末期に日本海沿岸の勢美鯨が枯渇し、巨大鯨組が自滅に追い込まれた。この結果、幕末期から明治初期には多くの中小鯨組が出現し、鯨組の乱立状態となった。明治中期以降は船・捕獲技術の向上で、より遠方の鯨を捕獲できるようになると、朝鮮半島周辺の鯨を捕獲する東アジア捕鯨業へと発展した。この発展要因には、近世中後期に栄えた日本海沿岸の漁場を擁していた西海・北浦両地域の漁村が、新たに捕鯨基地として、また労働力確保の地域として活用されることになったと考える。

★西海捕鯨と北浦捕鯨との比較

	西海捕鯨	北浦捕鯨
支配体制	平戸藩、五島藩、大村藩、唐津藩、対馬藩	萩藩、長府藩
漁場(沿岸漁業)	請負人による浦請制(運上銀による漁場利用権)	漁村の専用漁場(地先漁業権)や入会漁場 ➡入漁による浦請制の拡大
鯨組の開始時期	寛永年間(突取法、1624年~)	延宝年間(網取法、1673年~)
資金調達	商人からの借用(鯨組株の移動)	藩からの貸与のほか浦役人、問屋
組織と労働力	専門職の養成と各地から加子雇用	漁村における漁民(浦百姓)からの動員(漁撈組織)と西海からの雇用
捕獲高(鯨の種類)	年間50~100頭(勢美鯨・座頭鯨) 最盛期の巨大鯨組1組	年間10~20頭(座頭鯨・勢美鯨) 漁村単位

引用文献

(1) 末田智樹(2004)『藩際捕鯨業の展開－西海捕鯨と益冨組－』御茶の水書房
(2) 末田智樹(2013)「西海捕鯨業地域における益冨又左衛門組の拡大過程」、『国際常民文化研究叢書－日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究－』第 2 巻
(3) 末田智樹(2013)「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽－天明初期益冨組の鯨捕獲をかいま見る－」、『民俗と歴史』第 31 号
(4) 末田智樹(2013)「平戸藩領域における益冨又左衛門組の成長過程－安永 9 年鯨組運上史料一瞥－」、『中部大学人文学部研究論集』第 30 号
(5) 末田智樹(2013)「寛政前期の平戸藩

領域における捕鯨業の一様相－益冨大嶋組の運上史料から探る－」、神奈川大学『国際常民文化研究機構年報』第 4 号
⑹ 末田智樹（2015）「寛政初中期平戸藩領益冨組の取揚鯨と運上銀」、神奈川大学『国際常民文化研究機構年報』第 5 号
⑺ 荒野泰典編（2008）『グローバリゼーションと反グローバリゼーションの相克－捕鯨を手がかりとして－（平成 16 年～19 年科学研究費補助金研究成果報告書）』
⑻ 岩﨑義則（2010）「捕鯨業者井元弥七左衛門と平戸藩」、九州大学『史淵』第 147 輯
⑼ 古賀康士（2010）「西海捕鯨業における地域と金融」、『九州大学総合研究博物館研究報告』第 8 号
⑽ 小島孝夫編（2009）『クジラと日本人の物語－沿岸捕鯨再考－』東京書店
⑾ 中園成生･安永浩（2010）『鯨取り絵物語』弦書房
⑿ 森弘子･宮崎克則（2012）「西海捕鯨絵巻の特徴」、西南学院大学『国際文化論集』第 26 巻第 2 号

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

⑴ 末田智樹、天保期, 長門国見島浦への九州鯨組の入漁背景とその条件、地域漁業研究、査読有、第 58 巻第 3 号、印刷中、2018 年

⑵ 末田智樹、天保期, 長門国須佐浦への九州鯨組の入漁背景とその条件、山口県地方史研究、査読有、第 119 号、印刷中、2018 年

⑶ 末田智樹、文化期, 通･瀬戸崎両浦への九州鯨組の入漁事情、山口県地方史研究, 査読有、第 117 号、pp. 31－46, 2017 年

⑷ 末田智樹、長州捕鯨業と九州鯨組との関係についての一考察－寛政 2･3 年大村藩深澤与六郎組入漁から探る－、神奈川大学日本常民文化研究所年報、査読無、2014 版、 2016、pp. 81－106, 2016 年
http://hdl.handle.net/10487/13741

〔学会発表〕（計 10 件）

⑴ 末田智樹、西日本近海の捕鯨業における雇用と漁場利用、2018 年度地域地理科学大会、2018 年

⑵ 末田智樹、近世西日本近海における鯨組の出漁と漁場利用の変化、歴史地理学会第 61 回大会、2018 年

⑶ 末田智樹、近世西日本近海の巨大鯨組の出漁と交流、第 7 回交通史学会大会、2018 年

⑷ 末田智樹、天保期長門国須佐･見島両浦への九州鯨組の入漁事情と漁場利用の拡大、地域漁業学会第 59 回大会、2017 年

⑸ 末田智樹、北浦地域の捕鯨漁場と九州鯨組との関係、第 125 回山口県地方史研究大会、2017 年

⑹ 末田智樹、九州鯨組の出漁による近世日本海沿岸捕鯨業の展開、社会経済史学会第 86 回全国大会、2017 年

⑺ 末田智樹、西海･北浦両地域における巨大鯨組の出漁－近世日本海沿岸捕鯨業の発展－、社会経済史学会中国四国部会大会シンポジウム、2016 年

⑻ 末田智樹、近世日本海沿岸における西海地域の巨大鯨組と北浦地域の捕鯨漁場との関係、地域漁業学会第 58 回大会、2016 年

⑼ 末田智樹、寛政･文化期北浦地域への九州鯨組の入漁事情、第 123 回山口県地方史研究大会、2016 年

⑽ 末田智樹、長州島戸･肥中両浦への大村藩松島深澤組入漁の再検討－日本海沿岸捕鯨業地域の特色を考える－、地域漁業学会第 57 回大会、2015 年

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
〔講演会・研究会など発表〕（計 4 件）

⑴ 末田智樹、寛政･文化･天保期九州鯨組の出漁と長門国捕鯨漁場の変遷、第 11 回水産史研究会、2017 年

⑵ 末田智樹、近世中後期北浦地域における九州鯨組の展開、一ノ坂研究会、2017 年

⑶ 末田智樹、近世後期北浦地域への九州鯨組の入漁とその背景、第 10 回水産史研究会、2016 年

⑷ 末田智樹、古文書からみる江戸時代の鯨捕り－日本海沿岸をかけめぐった九州の巨大鯨組－中部大学･日進市地域連携講座〔計 3 回〕、2016 年

６．研究組織

(1)研究代表者
末田　智樹（SUETA, Tomoki）
中部大学･人文学部･准教授
研究者番号：80387638